

第一部

竹中半兵衛重治公の生涯



垂井町岩手 竹中家陣屋前の銅像

第二部

竹中半兵衛重治公の絶筆



垂井町岩手 禅懂寺所蔵自画像

第三部 「武功夜話」の竹中半兵衛の記述

令和三年十二月 発行 水野隆生

第一部

竹中半兵衛重治公の生涯

一 初めに

戦国時代、羽柴秀吉に仕えていた竹中半兵衛重治公は天下統一実現のための軍略に命を懸けた人生でありながら、出世欲や領土的野心は皆無。流血の戦いを嫌う平和主義者であった。より犠牲者の少ない戦法や説得により主将を味方につけたりした。智謀で平和的な世の実現を目指していた。また、勉強熱心で知性が高く、信義に篤い人柄で、武士道を買った高潔な人生を送った武将である。ここに、彼の生涯について調べたことを原稿にした次第です。

二 生涯について

天文十三年（一五四四年） 一歳

九月十三日、大野郡大御堂（揖斐郡大野町公郷）に於いて生まれ育てられる。父竹中重元（重道）、母杉山久左衛門の娘。

弘治二年（一五五六年） 十三歳

四月、斎藤道三と子の義龍との間で長良川の戦いがあり、道三討死。道三側に竹中重元、岩手弾正信久が付き、信久は戦死。戦後、義龍側の安八郡西保城主不破光治ら大御堂の屋敷に來襲、重元は留守であったが、妻女妙海大姉、半兵衛、十歳弟久作とともに撃退する。

（注 不破郡史には「一五五九年不破光治菩提山城に來襲するも、撃退」と記されている）

永祿元年（一五五八年） 十五歳

父重元、大御堂より兵を率いて不破郡岩手城の岩手弾正信冬を攻め、岩手領を押領する。

父重元、菩提山城を築き、西福に邸を構え移り住む。

福田・長松・栗原・岩手・府中・梅谷・荒尾・松尾の付近一帯六千貫を領す。

永祿三年（一五六〇年） 十七歳

十二月、近江観音寺城の六角義弼の求めに応じて、重元は江北に侵入する。

永祿四年（一五六一年） 十八歳

二月、重元再び六角氏の要請に依って江北に侵入、大原口、荊安尾で浅井勢と戦う。

閏三月二十五日、六角義治（義賢・承禎の嫡男）、重元に感状を贈る。

五月と六月 斎藤龍興に仕えていたときに信長に攻められるが、半兵衛の「十面埋伏の陣」と呼ばれる独特の伏兵戦術で織田勢を破る。

注 彼独特の戦法で撃退した。やり方は全軍を伏兵として一旦通り過ぎさせた後、まず背面の兵を後ろから奇襲させ、残りの九面、つまり全方位から襲い掛かるといふもの。

永祿五年（一五六二年） 十九歳

二月七日、父重元六十四歳で没す。岩手村禅幢寺に葬る。半兵衛、家督を継ぐ。安藤守就の娘「阿古姫（とく）」と結婚する。

永禄七年（一五六四年） 二十一歳

二月七日、半兵衛は義父安藤守就と謀り、弟久作とともに手勢十六人を率いて斉藤龍興の稲葉城を乗っ取り、斉藤飛騨守ほか五名を討つ。龍興は逃れて稲葉郡黒野村鶴飼城に入る。

七月二十九日、岐阜市西壮敬念寺に重虎名で半兵衛禁制（折り紙）「於当寺内、濫妨狼藉、陣執、放火伐執竹木、非分之族、一切不可有之候、若令違犯者、可有交名注進候、速可申付候、

恐々 謹言

竹中半兵衛尉

重虎 花押

（注 岐阜市西壮の敬念寺に現存）

織田信長は美濃半国を与える条件で稲葉山城を渡すよう求めたが、半兵衛は断り、八月頃、半兵衛は龍興に稲葉山城を返し、近江湖北の浅井長政に身を寄せ、隠遁する。菩提山城は弟の久作（重矩・重隆・彦作）に託す。

浅井長政より客分として草野郷内に三千貫の禄を与えられる。

永禄八年（一五六五年） 二十二歳

半兵衛、浅井氏からの禄を辞して、近江より岩手に帰る。その後、栗原山に閑居する。後に、木下藤吉郎が半兵衛に説得に来る。（この話、江戸時代に発行された「絵本太閤記」から）

永禄十年（一五六七年） 二十四歳

八月十五日、織田信長は斉藤龍興の稲葉山城を攻め落とし、美濃を平定する。信長はもと斉藤家の重臣稲葉良通（後の一鉄）を通して、半兵衛を出仕させようとしたが、半兵衛は病を口実に断り、代わって弟久作を信長に仕えさせ、自分は近江浅井長政の家臣堀次郎の老臣樋口三郎左衛門の、松尾山長亭軒に身を寄せる。

永禄十一年（一五六八年） 二十五歳

織田信長、足利義昭を奉じて上洛する。この頃、信長に仕える。秀吉に従い六角承禎の居城観音寺を奪取する。

元亀元年（一五七〇年） 二十七歳

四月、信長は越前の朝倉義景を攻めで、手筒山城・金ヶ崎城を攻めるが、浅井長政の裏切りによって金ヶ崎より撤退する。このとき、秀吉軍に於いて弟久作は殿の陣に加わる。

六月、半兵衛は秀吉に誘降され、仕えることに承諾し松尾山を降りる。さらに秀吉と謀り、堀次郎と樋口三郎左衛門を調略に成功する。この功により信長から鎧一領・国光の短刀・黄金五十枚の褒美を与えられる。

この頃、半兵衛は重治の名を用いる。

六月二十八日、秀吉幕下にあつて姉川の戦いに出陣し、作戦戦術について献策する。また、弟久作は浅井の猛将遠藤嘉右衛門を討つ。織田信長は浅井長政を破ることになる。この後、秀吉は浅井方の属城横山城を預かり、半兵衛は秀吉に従って、横山城を守る。

十二月、秀吉は滋賀の陣に出陣したとき、横山城を蜂須賀正勝らとともに守る。

元龜二年（一五七一年） 二十八歳

二月二十四日、浅井方の属城磯野丹波守員昌の守る佐和山城攻略を計り、半兵衛は前野将右衛門、蜂須賀彦右衛門とともに浜中口から攻める。磯野は城を開き高島郡に退去する。

五月六日、半兵衛は秀吉不在の横山城にあつて、朝妻城・太尾（ふとお）城（米原市）を攻め箕浦城奪還に出てきた浅井方の攻撃を防ぎ、横山城を守る。

元龜三年（一五七二年） 二十九歳

正月 秀吉が新年の祝詞言上に上洛中、横山城に浅井勢が再び来襲、半兵衛は留守兵を指揮し横山城よく守る。出撃して傷ついた加藤光泰を助ける。

二月、半兵衛は藤吉郎の弟木下小一郎、前野将右衛門、蜂須賀彦右衛門らと官部善祥坊（繼潤）を攻め、調落する。

このとき、半兵衛は戦乱で困窮する百姓を助けることが急務だと説いて、地子銭免除・兵糧米百俵を与えるなどの策を秀吉に進言する。

五月、信長、石山本願寺を攻める。

九月、信長は信忠を伴い、虎御前山に出陣、秀吉に在番を命じる。半兵衛は木下小一郎、尾頭甚右衛門らと先発して虎御前山に至り、布陣して小谷城の浅井方に対峙する。

天正元年（一五七三年） 三十歳

八月、信長は朝倉・浅井誅滅を期して出陣、小谷城の浅井軍を包囲しておいて先ず二十四日、越前の朝倉義景を討ち滅ぼし、近江に取って返して小谷城攻めに掛かかる。秀吉陣にあつた半兵衛は、信長の妹で浅井に嫁しているお市の方とその女子三人の救出を申し出、信長の許しを得て城からの脱出に成功させた。また城攻めについては鉄砲を使用せず、本丸の浅井長政とその父親久政を分断するために、中間にある京極丸を真っ先に攻め落とすなど周到な準備のうえ戦い、その作戦の指導をする。小谷城落城する。

戦後、秀吉は小谷城を与えられ、湖北三郡を領する。

半兵衛の男子重門が生まれる。

天正二年（一五七四年） 三十一歳

大名となった秀吉は今浜（現・長浜）に新しい城を築き、城下の建設に取りかかる。半兵衛は町割りや行政組織を定めるなど町作りを考え、生活困窮者には年貢を免除する代わりに労役に出させるなど、施設について献策する。

天正三年（一五七五年） 三十二歳

正月、秀吉は長浜城に移り、多くの家臣を新たに召し抱える。半兵衛は一千五十三石を受ける。

四月、武田勝頼との長篠の戦いに、秀吉の与力として出陣する。半兵衛は、武田勝頼の陽動作戦を見破り、鉄砲隊の一斉攻撃などにより信長の勝利に貢献する。

天正四年（一五七六年） 三十三歳

信長、安土城建設にかかる。半兵衛は浅野弥兵衛、官部善祥

坊らと築城工事に当たり、蛇石といわれる巨石の運搬に奇策を出して成功させる。

天正五年（一五七七年） 三十四歳

三月、秀吉は紀州雑賀攻めから石山本願寺攻めにまわされ、半兵衛と木下小一郎に天王寺砦を守備させる。

八月、秀吉は上杉討伐の加賀の陣に、後備えとして出陣。作戦について大将柴田勝家と意見合わず無断で陣を撤し、長浜へ帰陣する。その軍議のとき半兵衛はすぐに播磨計略にあたるべきことを説き、帰陣を勧める。

九月五日、秀吉長浜に帰り、信長より謹慎を命ぜられる。

七日、半兵衛は木下小一郎、前野長康、蜂須賀らと播磨計略に向かう。

九月二十二日、半兵衛らは播磨から、小寺官兵衛の子松寿丸を人質として長浜に連れて帰る。

信長は播磨調略の進んだことを喜び、秀吉の謹慎を解く。

十月十九日、秀吉は播磨に出陣、小寺官兵衛の姫路城に入り、十一月末、秀吉は、半兵衛と官兵衛に命じて、播磨福原城を攻めさせる。

十二月、秀吉は播磨上月城を落とし、但馬平定の報告に安土に出かける。秀吉留守中、半兵衛と蜂須賀が龍野城を守る。この頃から、半兵衛は病床に臥すことが多くなる。

天正六年（一五七八年） 三十五歳

二月、別所宗治謀反の動きに、秀吉不在の龍野城で半兵衛らは軍議を開き、秀吉の帰陣を求める。

秀吉は別所宗治の三木城攻めを命じられ、半兵衛も、その陣中

にあつて帷幄（いあく）に参じ、但馬の諸將の調略につとめる。

五月二十四日、戦況報告に京へ上つた半兵衛は、信長に備前八幡山城主明石景親が味方になった旨、奏上する。信長から秀吉に黄金百枚、半兵衛には銀子百枚を与えられる。

注 「信長公記」には竹中重治に銀子百両とある。

六月、半兵衛は播磨に帰陣、備前八幡山城主明石景親を介して宇喜多直家と忠家を調略する。

十月、三木城攻囲陣にあつた荒木村重が陣払いをして伊丹に帰り、謀反を起こす。説得に出かけた小寺官兵衛は有岡城で村重に捕らえられ、土牢に幽閉される。官兵衛を疑った信長は、人質の松寿丸を殺せと命じたが、半兵衛はひそかに岩手城の近くに松寿丸を匿う。

十一月、秀吉の上洛に半兵衛従い、半兵衛は京都で療養する。 4

天正七年（一五七九年） 三十六歳

三月、半兵衛は、「戦中で死ぬことこそ武士の本望」と言つて、病を押して播磨三木攻囲陣に赴いたとされる。このとき、三木城を兵糧攻めによる無血開城戦法を検索している。

（注 この無血開城戦法は、後の備中高松城の水攻めに用いられている。）

秀吉は城下の民家に半兵衛を入れ、弟久作に介護させる。

六月九日 福知山に出陣していた前野将右衛門に宛てた手紙で半兵衛は出家の志のあったことを告げている。姫路の書写山に在城したとき僧衣、経文等を求め、あらかじめ高野山に送っている。

六月十三日、半兵衛は三木陣中で没する。半兵衛の遺体はその

遺言通り、三木城外平井の陣所に近い長禪寺に葬られる。
法名 禪幢寺殿深龍水撤。

(注 三木での療養中、半兵衛が、「戦が終わったら地子免除にして町人呼び返し、くれぐれも庶民を・・・」と、秀吉に言い残している。秀吉はこの半兵衛の進言を取入れて、戦後これまで未納年貢を取り消し、三木・淡河領民の諸役の免除を実行し、民衆の暮らしを守っている。この復興策によって、三木町は商工業が活発化し、大工道具の生産が始まったと考えられる。)

六月二十二日、羽柴秀吉の与力に付けられていた竹中重治が、播磨の陣中で病死した。信長はその後任として、お馬廻りを務めている弟竹中重隆(久作)を播磨へ派遣する。

(この記述は太田牛一の「信長公記」から)

九月、荒木村重有岡城を捨てる。小寺官兵衛救出される。

天正八年(一五八〇年) 一月十七日に三木城落城。

天正十年(一五八二年) 六月二日 本能寺の変で信長が明智光秀の軍に殺されると、六日に弟久作の所領表佐の土豪達も、これに呼応して一揆が勃発、その鎮圧のために出陣したが、敵の児玉又平にかかり討死する。享年三十七歳。

慶安元年(一六四八年) 四月十日 妻 得月院没す。

三 竹中半兵衛の「鳳」花押について

半兵衛の晩年の花押は「千年おとり」と 言われる。千年に一度この世に現れると信じられていた動物すなわち鳳凰を意味するので平和な世への願望を表す。「岐阜市史」通史編に

は、この「鳳」の花押は岐阜市山県北野にある大智寺の高僧の詩に影響を受けた「和平」への強い意志を現したものと記している。

注 花押は垂井町観光協会パンフから

四 終わりに

半兵衛公の生涯を振り返るに、次のような人物と言える。

- ① 武功よりも知略を好む。即ち、武芸の修練よりも、需書や兵法書を読んで勉強に興味を持つ少年であった。
- ② 野心なく名利に恬淡。即ち、自分の名利を求め、野心ももって事をするようなことはない。
- ③ 信義を重んじた誠実さ。即ち、信義を大切にし、自分の言動には責任を持つ誠実な人間である。
- ④ 軍略や兵法から学んだことと、実際の戦とを重ね合わせ、研究を怠らなく、兵法軍略を後世に残すべく「竹中流兵書 六巻」を執筆している。
- ⑤ 戦略や作戦を考えるとき、人間の心理への深い洞察の上に立って、知略才覚を働かせる。
- ⑥ 人の心理に深い洞察を持ち、人を見る確かな慧眼を持っている。
- ⑦ 安寧を願う優れた治世家。即ち、より犠牲者の少ない戦法や説得により主将を味方につけて、流血戦を嫌い戦わずして勝つという平和主義者である。また、戦争で疲弊困窮に陥った百姓の生活を安定させることが、戦に勝利する以上に大切であるという信念を持っている。



五 参考文献

- ① 竹中半兵衛のすべて 池内昭一著 新人物往来社
一九九六年発行
- ② 竹中半兵衛と黒田官兵衛 本山一城著
一九八八年 村田書店
- ③ 現代訳 信長公記 太田牛一著・中川太古訳
二〇一四年発行

第二部

竹中半兵衛重治公の絶筆

一 初めに

戦国時代、羽柴秀吉に仕えていた竹中半兵衛重治公の生涯を調べていく中で、亡くなる直前の天正七年六月九日付、同臣の前野長康へ宛てた書状に感慨深いものを感じ、原稿にした次第である。

二 福知山の陣中の友人・前野長康に宛てた最後の自筆文

一筆啓上し候

期陰晴定まりなく連日の霧雨の内、其元いよいよ勇健弥重く存じ奉り候

それがし帰陣以来、病臓に入りて聊かもって閉口、御役に

も相立たず因臥候も手肢上下歩行は、異これなく候

今日の晡時馬中にてまかり候、備中殿

今朝丹州に越すを聞く、氣息を相調え紙筆を運び候

五体より病魔去つて別条依々に候、恨みも楽しみも相無く只あるは茅屋をうつ雨音を聴きいるに及び、寂然として幽心満ち地を駆くる如く

一刀を捨て一杖に替え緇素の風体に候なり

私の目前茫々として指呼の中に在るは、山水自ずから声あつて人語り候如くに候

一人白雲に乗つて遊ぶが如くに候、浮雲欲心無く候、豈高名を望む者にこれなく候

草葉の一露、凝つて天空に相達し乱雲明日を隠す、忽ちにして車軸を流し

白雨一過すれば、蒼穹払うが如く天日輝き、万物を育む処と相成る

当今乱国いまだ畿内治らず、なお四強構えて譲らず、前途冥々たり

我湖北の閑居を払つて、平天下道の志を得たりと雖も病

褥に座起すれば、雨滴空しく骨力相無く候、

徒らに憶いを馳せ、武辺道拙く不甲斐無き限りに候これに引き替え、貴辺御手柄弥重く候、差し出ケ間敷苦言

に候哉

烏將に死なんとす、その声云々の喩あり、耳傾け候事ひたすら願ひ居り候

勝利のみ幸に無く候、猛勢は覇と成り易く候、これ保ち難く候なり

材あるを知らず、林中に入り材を求むる如くに候

丹中は速やかに退くべき候、すなわち上策と存知候

御主筑前様案じ入り候事に候、武辺功名は競わず明通安らんと事乞い願ひ候

まずは一書を奉るも意乱れて斯く如きに候

頓首

六月九日

竹 半兵衛

前野將右衛門どのへ

「武功夜話」によると、使者の加藤備中（光泰）は半兵衛と秀吉の手紙（十一日付）を持って丹波に向かった。しかし、長康の手に届いたのは六月下旬という。

稀代の戦略家竹中半兵衛公が三木陣中で没したのは、この数日後である。時に六月十三日、わずか三十六歳であった。半兵衛の遺体はその遺言通り、三木城外平井の陣所に近い長禅寺に葬られる。

法名は禅幢寺殿深龍水徹大居士である。

太田牛一の「信長公記」によると、六月二十二日、安土城の信長に報告され、羽柴秀吉の与力に付けられていた竹中重治が、播磨の陣中で病死したと。信長はその後任として、お馬廻りを務めている弟竹中重隆（久作）を播磨へ派遣するとある。

現代訳（半兵衛公の気持ちになつて解釈）

只今から、筆をとりお手紙を差し上げます。

近頃の天候は晴れたり曇ったりで定まりなく、連日霧雨の候、貴殿はますます壮健で珍重（ご自愛）のことと思ひます。私は陣中を離れて以来、病氣が内臓にまで入り、かなり手に負えなくて困っています。お役にも立てず、病のため寝込んでいますが、手足を動かし歩行は、普通にできます。

私は今日の日暮れどき、加藤備中殿【補足1】が馬に乗ってやってきて、明日の早朝に丹波に行くこと聞いたので。ならば、息を調べて、早速手紙を書いておきます。今は、五体より病魔が去って、別に変わったこともなく普通の状態であります。恨みも楽しみも無く、只あるのは茅葺の屋根を打つ雨音を聴いていると、何の雑念も無く心静かになり、空を飛んでいるような気分であります。

それは太刀を捨て杖に替えて仏門（姫路書写山に在住してたとき僧衣・経文等を求め、あらかじめ高野山に送っている）に入る身なりになっています。

私の目の前は、広々としていて、眼前の近くにあるのは山水でその音は自らの声もあって、人が語り合っているように聞こえます。

気分は一人白雲に乗って遊んでいるようで、空に浮かんでいる雲のように欲心は無く、従って決して高名を望む者ではありません。

草葉に置く一粒の露が凝って大空高く昇り、乱雲となつて明るい日を隠すが、たちまちにして大雨が降り、また、にわか雨が過ぎれば、青く晴れた空から太陽の光が輝き、万物を育てるところと成る。

今現在、戦で乱れている国々は、いまだに畿内（山城・

大和・河内・和泉・摂津)で治まらず、なお丹波の四強【補足2】は頑強に構えて譲らず、この先暗いままです。

私は琵琶湖の北、長浜(または木之本)にある静かな住まいを引き払って、世の中が平和になるようにと志を持っているが、病で寝起きしているの、高い志が雨粒のようにむなしく消えて、体力もまた無いのであります。

いたずらに想い巡らせるばかりで、戦で勇敢に戦うこともできなくなり、情けない限りです。これに引き替えて、貴殿の功績はますます素晴らしく立派であります。差し出がましく言いにくいことではあります(今から述べます)。烏が今まさに死のうとする、その声は偽りもなく飾りもなく純粹であるという喩があります。どうか(私の述べることを)耳を傾けてお聞きくださることをひたすら願っております。

戦で勝つことだけが幸せではなく、強い武力や権力は、力づくで国を治めることができますが、これでは長く国を治められません。木材(人材)が今ここに有ることに気づかないで、また林の中に入って木材を求めると同じです(無駄なこと)の比喩)。伊丹国(伊丹城主の荒木村重攻め)は速やかに陣を払い退くべきです。すなわち、退くことが一番良い策だと思えます。

主君の筑前様(羽柴秀吉)も考えておられることとごぞいます。武士の手柄などを競わないで、安寧になることを切望します。

まずはお手紙を差し上げるも私の意がまとまらずこのような文になりました。

(天正七年)六月九日

竹中 半兵衛

頓首

前野将右衛門殿【補足3】へ

補足

【1】加藤備中守光泰(一五三七〜一五九三)

美濃多芸郡の土豪で、初め斎藤龍興に属するが、信長により斎藤家が滅亡したため浪人をしていたが、程なく秀吉に召し抱えられている。光泰は初期の秀吉家臣団の中で半兵衛が最も親しくした戦友である。

元龜三年、秀吉が留守中の近江横山城に浅井長政が攻撃、留守を預かる半兵衛と加藤光泰が、これを防いだだが、城外で光康が膝を負傷、動けない光泰を半兵衛は手勢を率いて危機を救っている。

天正七年播磨三木城攻めで功を挙げ、丹波周山城主一万七千石、近江貝津城主、高島城主二万石を務め、天正十三年には美濃大垣城主となる。天正十八年の小田原城攻めに功を挙げて甲府城で二十四万石を領した。文禄元年(一五九二)の朝鮮出兵で渡海するが、帰国途中で病死す。

追記 半兵衛は生涯で太刀を振ったのはたったの二回だけ。一回目は永禄七年の稲葉城乗っ取り事件のとき、二回目は、元龜三年近江横山城へ浅井長政が攻撃した際、城外で同臣の光泰が膝を負傷したのを見て、半兵衛が助けに行ったとき。

【2】加藤備中守が丹波に向かわれていることを考えて、当時丹後の国人衆は以下の五人ほどがいる。そのうちの四強は誰を指しているかわからない。

一人目、八上城主の波多野三兄弟、秀治・秀尚・秀香。六

月四日降伏。

二人目、八木城主内藤有勝・正勝討死。六月二十七日落城。

三人目、宇津城主宇津頼重。七月十九日逃亡。

四人目、黒井城主赤井忠家。八月九日逃亡し落城。

五人目、横山城主塩見信房・弟信勝自刃。八月二十日落城。

注 伊丹城主の荒木村重は九月二日夜、家臣・妻子を残して数人の供を従え伊丹城を脱出、尼崎の城に移る。十一月、立て籠もっていた荒木久左衛門らは城を退去。前年の十月、明智光秀は謀反を起こした村重の説得に織田信長の命に依り派遣されたが、説得できず、後に、小寺官兵衛も説得に出かけている。その後、消息不明の官兵衛の安否を気遣い伊丹国から陣を払うようにと書いたのではないか。

【3】前野将右衛門尉長泰（生年不明く一五九五）

幼名は小太郎。但馬守。父宗康の二男。長泰の兄雄吉の孫雄瞿（かつかね）が著した「武功夜話」には長泰と半兵衛の交流が詳細に記されており、半兵衛にとって長泰は秀吉家中で最も親しい存在であったと思われる。

元龜元年（一五七〇）、半兵衛と共に浅井方の磯野員昌が守る佐和山城を攻め、これを調略、翌年二月には宮部善祥坊の調略に成功している。

天正五年（一五七七）九月には両者は秀吉より、一足早く播磨経略略に向かう。秀吉の中国出兵では長泰は但馬方面を、半兵衛は播磨を転戦しているが、両者はお互いに手紙を交わして友情を温めている。同七年付の長泰宛て半兵衛の書状には自らの出家の意志があったことを告げている。この四日後、半兵衛は三十六歳の生涯を閉じた。この悲報を長泰は但馬福知山への出陣中で受けたのである。

天正十一年の賤ヶ岳の戦いに功を挙げて播磨三木城主となり、同十三年には但馬出石城五万七千石に移封された。同十五年の九州征伐、同十八年の小田原城攻めにも従軍。文禄元年（一五九二）の朝鮮の役では渡海して京城で戦況の監督をしている。

晩年は豊臣秀次の後見役となるが、文禄四年七月、秀次が秀吉の怒りに触れ自害すると、長泰もこれに連座、八月十九日切腹する。

追記 関ヶ原の戦いとき、石田三成の配下で戦った黄母衣衆の一人である前野忠泰（舞兵庫）は、長泰の娘と結婚している。

三 人物像について

半兵衛公の生涯を振り返ることで、彼の人物像を次のように考えられる。

① 武功よりも知略を好む。即ち、武芸の修練よりも、儒学書や兵法書を読んで勉学に興味を持つ少年であった。

② 永禄七年二月、城主斎藤龍興を諫めるため稲葉城乗っ取り事件が起きた。織田信長は美濃半国を与える条件で稲葉山城を渡すよう求めたが、半兵衛は断り、八月頃、半兵衛は龍興に稲葉山城を返している。このように、出世欲や領土的野心はなく自分の名利など決して求めない人物である。

③ 平生からの心がけ。即ち、軍略や兵法から学んだことと、実際の戦とを重ね合わせ、研究を怠らなく、兵法軍略を後世に残すべく「竹中流兵書 六卷」を執筆している。

④ 戦略や作戦を考えるとき、人間の心理への深い洞察の上に立ち、知略才覚を働かせている。

その例として、天正三年四月、武田勝頼との長篠の戦いに、秀吉の与力として出陣する。半兵衛は、武田勝頼の陽動作戦を見破り、鉄砲隊の一斉攻撃などにより信長の勝利に貢献している。

また、天正六年六月、備前八幡山城主明石景親を介して宇喜多直家と忠家を調略している。

⑤ 人の心理を深く見抜くことができ、人を見る確かな慧眼を持っている。

この良い例として天正六年十月、三木城攻囲陣にあつた荒木村重が陣払いをして伊丹に帰り、謀反を起こす。説得に出かけた小寺官兵衛は有岡城で村重に捕らえられ、土牢に幽閉される。官兵衛を疑った信長は、人質の松寿丸を殺せと命じたが、半兵衛はひそかに岩手城の近くに松寿丸を匿って命を助けている。

⑥ 安寧を願う優れた治世家。即ち、より犠牲者の少ない戦法や説得により主将を味方につけて、流血戦を嫌い戦わずして勝つという平和主義者である。また、戦で疲弊困窮に陥った百姓の生活を安定させることが、戦に勝利する以上に大切であるという信念を持っている。

三木での療養中、半兵衛が、「戦が終わったら地子免除にして町人呼び返し、くれぐれも庶民を・・・」と、秀吉に言い残している。秀吉はこの半兵衛の言葉を尊重して、戦後それまでの未納年貢を取り消し、三木・淡河領民の諸役を免じている。

⑦ この書状には比喩や諺があり、豊かな教養を身に付けた武士といえる。

四 終わりに

竹中半兵衛重治公の生涯については、多くの方が知るところであるが、亡くなる前年の天正六年十一月には、羽柴秀吉の上洛に従い、半兵衛は京都で病氣療養している。翌年三月、半兵衛は、病を押して播磨三木攻囲陣に戻っている。これを知った秀吉は城下の民家に半兵衛を住まわせ、弟久作に介護させている。

どこの場所で、書いたか分からないが、親友・前野将右衛門への前述の文面には、死が近いことを覚悟した半兵衛の偽らざる気持ちにじみ出ている。加藤備中守光泰が突然、見舞いに来た帰りに、心置き無く話せる同臣前野長泰に渡して欲しいと願い、夜を徹して書き上げた書面のようである。その内容は、今の病状を述べつつ、丹後攻めの状況を案じている。また、武士道において最も大切な戦う気持ちが亡くなり、情けないとも綴っている。

今後は、病気が快復したら、戦から離れて静かに高野山にて仏門に入る気持ちを伝えている。

また、療養中にもかかわらず、主君秀吉様も考えておられるように、伊丹国から陣を払うようにと考えている。

最後に、戦は勝つことのみが幸せでなく、戦わずして国を治めること、百姓の生活を安定させることが、戦に勝利する以上に大切であると切望している。この言葉こそが竹中半兵衛重治公の平和への強い願いを如実に示している。

五 参考文献

① 竹中半兵衛のすべて 池内昭一著 新人物往来社

一九九六年発行

② 竹中半兵衛と黒田官兵衛 本山一城著

一九八八年 村田書店

- ③ 現代訳 信長公記 太田牛一著・中川太古訳
二〇一四年発行
- ④ 歴史旅人 令和元年十月号株式会社晋遊舎 発行

第三部

「武功夜話」の竹中半兵衛の記述

一 竹中半兵衛重治のこと

美濃国不破郡岩手の城主に、竹中半兵衛（重治）という武将がいた。半兵衛の弟を久作という。半兵衛は稲葉山の斎藤右兵衛（龍興）の被官の中でも、きわめて高名の者であった。

去る永禄十年（一五六七）、信長公が右兵衛を逐い、稲葉山城に入城されたおり、斎藤の家人たちは人質を差し出し恭順したが、なかでも西美濃三人衆の稲葉伊代守（良通）、氏家ト全（直元）、安藤守成らの諸将は、人質とともに神文誓紙を信長公に進上、不変の忠節を誓ったものである。

ところが、岩手の城主・竹中半兵衛は、先年、小才をろうして奇抜な事件を惹起（じゃっき）したこともあって、信長公は、とくにこの者に注目され、使者をもって仕官をすすめたにもかかわらず、首を左右にして従おうとしなかったのである。しかも、稲葉山城が落城してからは在所に引き籠り、家督を舎弟の久作に譲ると、己は刀を捨てて風月を友とし、隠世。信長公の稲葉山城入城に際して、国侍たちが競って伺候する中を、一人して孤高を守ったのであった。

ある日、信長公は稲葉良通に岩手の半兵衛の消息を尋ねられるとともに、半兵衛の奇才を惜しむあまり、良通をして竹中半

兵衛の出仕を促されたところが、またも半兵衛が申すには、近頃は病気がちで、とてもご奉公はむりである。家督も弟久作に譲って蟄居している有り様。願わくは弟久作は浪人をしていもの、身体も強壯で武辺にも精進しているので、なにかと御役に立つことと思う。本日の信長公のご厚情には感謝しているとのこと。

稲葉良通も納得して、久作を伴い、お城に帰り、報告申し上げたところ、信長公は子細を聞かれて半兵衛の心根をよしとされ、半兵衛累代の所領岩手を安堵なされたのであった。久作は、いうまでもなく、粉骨碎身、惜しみなき忠節を尽くしたが、やがて竹中半兵衛は岩手の城を去り、浅井備前（長政）の被官樋口三郎兵衛（直房）の居城である江東の、長亭軒の城へ退いて遁世したという。この樋口家は江州・浅井備前家とは縁家なれば、高氏・竹中半兵衛はつつがなく暮らしたことである。11

二 浅井氏の滅亡のこと

天正元年（一五七三）信長公は朝倉右京大夫を攻め落とされたのち、小谷城攻めを羽柴筑前様に下知されたので、小谷山の浅井備前（長政）に使者を派遣、降伏するように働きかけをなされたのである。

しかし、浅井は武門の意地から降伏しなとなれば、無闇に攻めることは備前の妻女の一命をも失う恐れがあった。また、信長公からも浅井備前父子は憎むものの、兄妹の情は捨て難いとの言葉もあり、羽柴筑前様とて一命にかえてお引き受けしたからには、ぜひとも成就させるべく、良き手だてを求めたために頭衆を集められたのであった。

一、軍師の竹中半兵衛（重治）がいうのに「力と恃んだ朝倉が相果て、いまや小谷山城も生気は乏しい。小谷山城、京極つづらの要害堅固とはいえ、攻め立てれば攻略もさほど難しくはないが、だが、力攻めは大殿の妹御母子の一命も危うくする。親子の情は一世、夫婦は二世の契りというから、まずは京極つづらの浅井下野（久政）親子の間を断つことである」

と。羽柴筑前様は片膝をうち、
「半兵衛のいうことは理にかなっている」

その結果、小谷本城との間を遮断し、京極つづらを落とすという作戦は、砦を落とし、本城を備前（長政）も父に遠慮なく、己の命運も尽きたることを覚悟させることで、子女の道連れなどは考えず、御妹御様の一命も助けられるであろうと、との軍師竹中半兵衛の言葉によったものであった。

* これこそ、戦略や作戦を考えるとき、人間の心理への深い洞察の上に立ち、**知略才覚**を働かせた半兵衛の良い例である。

三 松永弾正久秀の謀反のこと

天正五年（一五七七）。竹中半兵衛は「私は過日來、松永弾正の用兵を注意深くみているが、老練の采配である。彼の用兵ぶりは石山在番の寄せ手大将・佐久間右衛門（信盛）をはじめ蜂屋、武藤、中条、福富の少将を侮っているようだ。その理由は、彼が元來、反覆定まらぬところにある。都においては先の公方足利殿を殺し、また三好義長を殺害した。佐久間右衛門は、その氣質を知っているから、彼には心を置いていない。いまは信長公に従っているが、もともと二心を抱く者であるから、いずれ惑いを生じて、ついには逆心を抱くに違いない」という。

その後、この松永弾正は、筑前様が加州（加賀）にこられて十有余日を経ずして、案のごとく志賀山城に拠り、謀反を起したのである。

* 信長は、嫡男・織田信忠を総大将、筒井勢を主力とした大軍を送り込み、十月には信貴山城を包囲させた。佐久間信盛は名器・古天明平蜘蛛を城外へ出すよう求め、久秀は「平蜘蛛の釜と我らの首の2つは信長公にお目につけようとは思わぬ、鉄砲の薬で粉々に打ち壊すことにする」と返答した（『川角太閤記』）。織田軍の攻撃により、久秀は十月十日に平蜘蛛を叩き割って天守に火をかけ自害した。

* これこそ、人の心理を深く見抜くことができ、**人を見る確かな慧眼**を持った半兵衛の良い例である。

四 加州より帰陣のこと

天正五年（一五七七）柴田勝家殿の上杉攻めの方針について、羽柴様は諸將を集められ、ご協議をなされたが、以下は、そのおりの各將の意見であった。竹中半兵衛曰く。

「上杉景虎（謙信）は老練の武将である。織田方が国境を越えて侵入しなければ、上杉方から合戦を仕掛けてくることは百に一つもあるまい。したがって、大聖寺、御幸塚、松任の各砦を堅固にし、柴田、佐久間両將の軍勢が守れば安泰である。ゆえに大軍を、このまま加州にとどめておくは不用と存じますが、殿には、この場の進退についてどのように思われましか。」「羽柴筑前様曰く。

「いたずらに、この地にとどまって、柴田殿の指示に従うことは好まない。」半兵衛曰く。

「“先んじれば之を制し”との諺もあります。この地にとど

まろうとも、上杉方が侵入してくることはありません。冬の降雪を迎えて手をこまねいて、いたずらに食するのは愚かの骨頂というもの。速やかに軍勢を返して、播州に進出すべきでありましょう。何卒ご思案のほどを。」 前野将右衛門曰く

「もし、万一、殿が内府公にお届けもせず無断で帰陣したことをお咎めになれば、そのおりに我らも一命は惜しまない覚悟です。一世の御大事なれば、何卒、早々にご覚悟のほどをお願い上げます。」

羽柴筑前様は皆の者の意見をよく聞いておられたが、やがて、軍法に違うとも、この際は帰陣すべく即座に決断された。

五 羽柴筑前と蟄居のこと

天正五年（一五七七）九月、羽柴筑前様が長浜において蟄居なされているところへ、御舎弟小一郎（羽柴秀長）様をはじめ前野将右衛門、蜂須賀小六、竹中半兵衛らが、播州表から帰着し、その首尾について報告された。なかでも、小寺官兵衛の嫡子松寿丸を伴い帰ったことは、筑前様をたいそう喜ばせた。

その日、直ちに松寿丸を連れて安土城へ参り、林佐渡殿（通勝・秀貞。織田家筆頭家老）を介して信長公に加州表の件について、重々お詫び申し上げ、お許しを求めることとなった。筑前様は軍法を曲げたについては十分覚悟のうえで平伏しておられたが、信長公からは暫しの間、なんらのお言葉もなかった。城中の控えの間にいた浅野弥兵衛（浅野長政）殿、蜂須賀小六殿、前野将右衛門殿、竹中半兵衛殿らは、どのような結果になるか、かたずをのんで見守っていた。しばらくして竹中半兵衛が口を開いた。

「筑前様は、このたび、播州という虎穴に入り、虎児を得られ

たのである。それでお咎めをこうむるのであれば我らも一蓮托生である。そう思えば何も恐れることもなければ、憂いもないではないか。もつとも法度を犯すことは重要ではあるが、播州での成果を挙げたのであり、これをもつておごることがなければ、また、その意は通じるというものだ。仁義があれば必ず通じよう」

この竹中半兵衛の一言により、緊張していた気持ちもいくらか和んだようであった。二時間あまり経ったころ、筑前様が微笑みをたたえながら御前を引き下がってこられた。つまり、内府公が、この度の件をお許し下されたのである。

* 半兵衛の言葉の中には**諺があり、豊かな教養を身に付けた武士といえる。**

六 姫路の城代小寺官兵衛のこと

天正五年（一五七七）十月のある日、姫路の城代小寺官兵衛なる者の進退について不明であったから、築前様は播州攻めに関してご協議の場を持たれた。筑前様曰く。

「このたびの播州入りにおいて、意気投合し、きわめて親しい間柄の者がおるであろうか」 竹中半兵衛曰く。

「私が思案しますに、官兵衛は生来のお気に入りがすることとは違っている。すでに居城を明け渡して殿を招置するなどは、必ずや褒貶（ほうへん）を招くであろうから然るべき手だてを要しましょう」

* 半兵衛と官兵衛はまだ、秀吉に仕える前は、褒貶を招く武士と官兵衛のことを述べている。

* 半兵衛と官兵衛の間は親しいと言うことではありませぬ。というか、秀吉様に仕える先輩と後輩関係で付き合い

もさほど長くはなく、「半兵衛と官兵衛が並び立って活躍した戦」は、この中国攻めの間、それも官兵衛が囚われの身になるまでの間という、僅かな期間に過ぎません。ただ、「同僚」という関係性しか読み取れない半兵衛と官兵衛ですが、そんな彼らの関係性を推測できるエピソードがある。

官兵衛は秀吉が約束した知行の加増をいつまでたつても実行しないことに不満を覚え、秀吉の花押が入った書状を持つて秀吉の前に現れて不満を述べたことがある。そのとき、秀吉の側にいた半兵衛が書状を手に取り、破つて燃やしてしまった。驚く官兵衛に対して、「こんな文書があるから不満を感じるのだ。それに貴様の身のためにもならない」と述べたとされる。

ちなみに半兵衛は、秀吉から加増を約束する書状を贈られた際「このようなものは竹中家の家中争いの元になるだけですので不要です」と破り捨てたという。

*これこそ、無欲で自分の名利など決して求めないという例である。

七 宇喜多和泉守（直家）調略のこと

天正六年（一五七八）六月 西国の毛利三家衆が、宇喜多和泉守（直家）、同七郎兵衛（忠家）らとともに、一万有余の軍勢をもつて、播州境の大亀山に布陣した。そして、吉川治部少輔（元春）の五千有余を先陣として、上月城の近くまで押し寄せ、厳重に陣所を構えた。

このような中、上月城の飢餓は日を追って窮乏化し、次第に敗色は濃くなりつつあった。すみやかに中国毛利氏の攻撃を防ぐ手立てを講じなければならなかった。そこで、蜂須賀小六（正勝）は竹中半兵衛と相談し、小寺官兵衛を案内役に、八幡山の

明石飛騨守（景勝）を介して、備前の宇喜多を味方に引き入れる工作をすすめることとなった。そうするうちにも、但州（但馬国）表では在子（ありこ）山の山名豊国（とよくに）が味方に参加してきた。後日、前野将右衛門殿が次のように話されたものである。

「これには帷幕（いばく）の将・竹中半兵衛の知略が目覚ましかったのである。筑前様が情勢の不利に心痛なされているおりには、備前の宇喜多を調略し、中国勢の攻撃を防ぎ、中道を遮断された計策はなにもにもかえがたい。但州鎮撫のための国侍の意を得る慧眼は、さすがに智者の半兵衛だけのことはあつたと感心したものである」

*半兵衛は戦略や作戦を考えると、人間の心理への深い洞察の上に立ち、知略才覚を持った策略家といえる。

八 半兵衛、京都で養生のこと

天正六年（一五七八）十一月 摂津表の荒木摂津守が別所と通じて謀反とのこと、安土城から報せがあつたため筑前様は竹中半兵衛を伴い、上洛なさることとなった。半兵衛は早くから風邪気味であつたところへ、長期間の野陣が重なり、日増しに憔悴し、臥せていたが、築前様が上洛にあたり暫時養生をさせるべく、ご同伴なされるになつたのである。前野将右衛門殿は馬上より退きゆく半兵衛殿見送った。別離の情禁じ得ず、暗涙落ちる。おもうに意合に人、病を得て京洛に去る。

*翌年三月、「陣中で死ぬこそ武士の本望」といい、病をおして播磨平井山の三木城包圍陣に戻る。

九 参考文献

武功夜話 信長・秀吉 前野家文書・加来耕三著 新人物往来社 一九九一年発行